

都城市文化財調査報告書第22集

丸谷地区遺跡群

KAMIDAIGOROU

上大五郎遺跡

丸谷地区県営ほ場整備事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

1993.3

都城市教育委員会



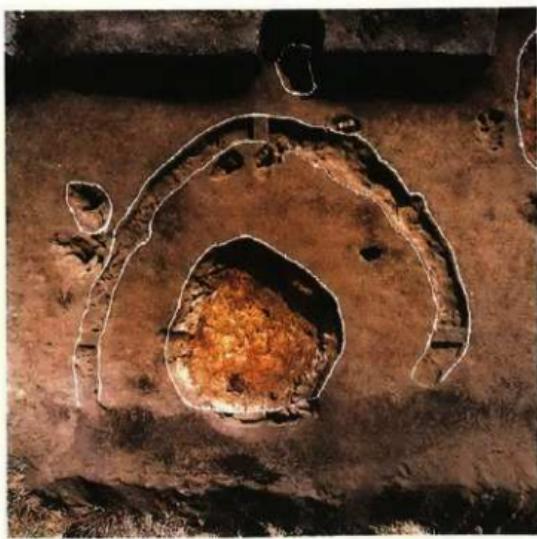
A 地区全 景



B 地区全 景



掘立柱建物群（A地区）



1号竪穴状遺構（B地区）

序

この報告書は平成4年度、丸谷地区県営ほ場整備事業実施に伴い、北諸県農林振興局の委託を受け、都城市教育委員会が実施した都城市丸谷町の上人五郎に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査の記録であります。

平成4年10月から平成5年2月までの現場における発掘調査の結果、縄文・弥生時代の遺構・遺物、古代～中世の集落跡などが発見されました。

これらの遺物を郷土の歴史的遺産として適切な保管を図り、本書の刊行が市史解明の貴重な資料となり、歴史教材として生かされるとともに、今後の学術研究に少しでも寄与できることを願っています。

本事業の推進と本書の刊行にあたり、発掘調査に参加された皆様、宮崎県北諸県農林振興局、丸谷地区土地改良区等の関係各位の御指導、御協力に対し、深甚の謝意を表しますとともに、直接発掘調査、報告書刊行に御尽力をいただきました県文化課に厚く御礼を申し上げます。

平成5年3月

都城市教育長
隈 元 幸 美

例　　言

1. 本書は、丸谷地区県営は場整備事業に伴い都城市教育委員会が実施した埋蔵文化財発掘調査の概要報告書である。
2. 発掘調査は平成4年10月5日から平成5年1月29日まで実施した。
3. 発掘調査は県文化課主事東憲章が担当し、図面の作成については東のほか補助員の援助を得、一部を業者に委託した。遺構・遺物は東が撮影した。
4. 調査にあたっては、北諸県農林振興局、大五郎土地改良区等の多大な協力があった。
5. 本書はIを都城市教育委員会が、その他を東が執筆し、編集は東が行った。
6. 本書に使用した遺構略号は以下の通りである。

S A - 橫穴状遺構 S B - 堀立柱建物 S C - 土坑 S E - 溝状遺構
S Z - 性格不明遺構

目　　次

I はじめに	1
1. 調査に至る経緯	
2. 調査の組織	
II 遺跡の位置と歴史的環境	2
III 調査の概要	4
IV 小　　結	14

I はじめに

1. 調査に至る経緯

宮崎県都城市丸谷地区では、平成3年度に県営は場整備事業が行われた。その事業に伴い、同年度に中大五郎遺跡の発掘調査が実施され、弥生時代の集落跡や中世の集落跡が発見された。さらに、平成4年度にはその西側の地域の造成が予定されていたが、平成4年7月に宮崎県文化課（面高哲郎主査）が試掘調査を行った結果、表土下の黒色土中から平安時代頃の土師器が発見された。これにもとづき、宮崎県文化課と宮崎県北諸県農林振興局との間で、埋蔵文化財の保護について協議が行われ、事業施工上保存が困難な部分については、事業と並行しながら記録保存の措置をとることになった（調査予定面積12,500m²）。その後、平成4年8月に宮崎県北諸県農林振興局が当該地区の設計変更を行ったため、埋蔵文化財の現状保存可能な地区が拡がり、最終的には調査予定面積は10,000m²となった。

発掘調査は都城教育委員会が主体となり、平成4年10月5日から着手し、平成5年2月初旬まで行った。なお、現場における調査は宮崎県文化課主事東憲章氏が担当し、出土品や図面の整理等は宮崎県埋蔵文化財センターと都城市埋蔵文化財整理収蔵庫にて行っている。

2. 調査の組織

調査主体 都城市教育委員会

教 育 長	隈 元 幸 美
文 化 課 長	成 竹 清 光
文化課長補佐	遠 矢 昭 夫
文 化 財 係 長	海 田 茂
文化財係主事	秉 犀 光 博
庶務担当主事補	田部井 寿 代
臨時職員	竹 下 愛 子
調査員	宮崎県文化課主事 東 憲 章

II 遺跡の位置と歴史的環境

上大五郎遺跡は、市内北東部を東流する丸谷川の右岸、標高約142mの低位段丘上に立地する。

蛇行する丸谷川によって浸食された迫田には、中世以降の水田址包蔵も確認されており、南北両岸から張り出す台地上には縄文時代から中・近世の遺跡が多く確認されている。周囲には野々美谷城、志和池城、山田城（山田町）など中世城郭も見られる。また、丸谷川と大淀川に挟まれた台地上には円墳と地下式横穴墓からなる志和池古墳群が展開する。

下薙遺跡では手向山式の壺形土器が採集されており、近接する堂山遺跡と共に縄文時代早期の遺跡として知られる。九州縦貫自動車道建設に伴って調査された丸谷第2遺跡では、縄文後期、弥生中期の遺物包含層を確認している。中大五郎、下大五郎の両遺跡では、弥生後期の住居址群、周溝状遺構等が調査されている。

11世紀に入ると荘園開発も活発になり、日向、薩摩、大隅にまたがる大荘園となる「島津庄」なども見られるようになる。のちに都城盆地を支配下におく北郷氏の居館および北郷300町は、市北東部、山田町、高崎町付近に比定されている。以後、北郷氏、伊東氏の対立を経て近世期を迎える。

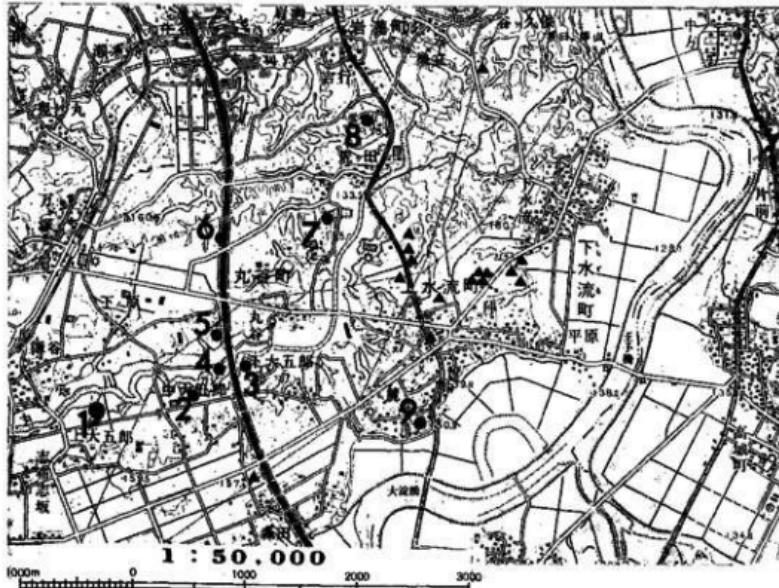
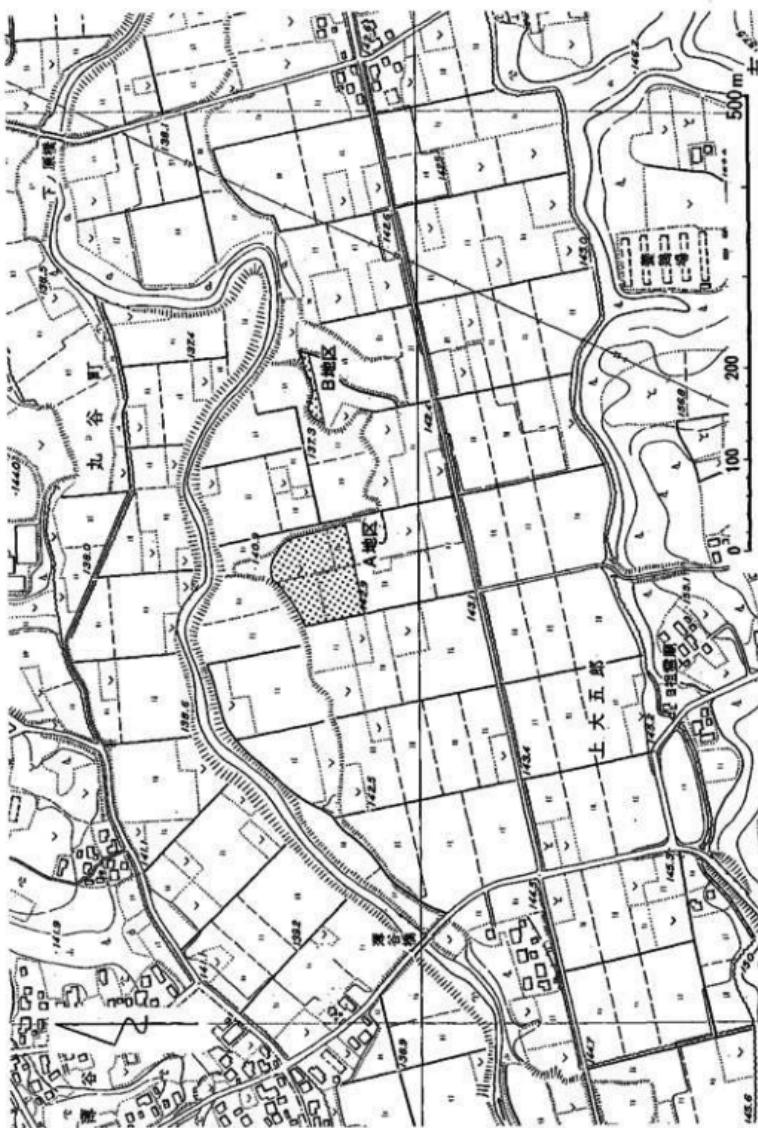


図1. 遺跡位置図

図2. 遺跡周辺地形図



III 調査の概要

上大五郎遺跡は、平成4年7月の県文化課による試掘調査の結果、平安時代から中世にかけての遺構・遺物の存在が確認されていた。また平成2・3年度の調査によって、弥生時代後期の集落が下大五郎・中大五郎と隣接する地で発掘されており、同様の時期の遺構・遺物の存在も推定されていた。本年度事業範囲の内、地下遺構の保存が困難な部分について発掘調査を行った。調査区は、A地区(7,000m²)・B地区(1,000m²)に分かれ、AB両地区にXY座標に合わせた10mグリッドを設定した。基本層序は図3の通りである。重機にてI・II層及びIII層上半部を除去した後、遺物包含層であるIII層下半部、IV層を掘り下げ遺構・遺物を検出した。遺構・遺物の分布には偏りが見られ、それは旧微地形の影響を示しているものと思われる。

A地区においては、弥生後期～古墳時代初頭の土器群が集中する箇所が見られたものの、その時期に比定できる遺構は検出されなかった。検出された遺構は、平安時代が掘立柱建物7棟・溝1条・土坑1基、中世以降が掘立柱建物9棟、時期不明の堅穴状遺構1基・土坑4基である。平安時代から中世にかけての土師器・須恵器・布痕土器が多量に出土し、また、越州窯系の青磁を含む陶磁器類も見られた。墨書き土器が破片ながら8点ほど確認された。鉄製釣針1点、土鍤25点も出土している。

B地区では、堅穴状遺構2基、土坑9基を検出した。堅穴状遺構のうち1基は周溝を持つものである。遺物は、弥生中期から後期の土器群が大部分を占めるが、中に縄文後期の土器も10数点含まれていた。また、磨製石鋸3点、磨製石斧1点も出土している。



図3 基本層序柱状図

1. 遺構

A地区

SA-1

d-6区に検出した。長軸350cm、短軸345cmの隅丸方形プランで、主柱穴を持たず壁際に小ピットが巡る。検出面からの深さは僅かに10cm程度で、ボラ層を若干掘り込んで床としている。埋土はボラを含む黒褐色土の単一層で、遺物は見られなかった。



SA-1

SB-1

b-9区に検出した。2間×3間で棟方向はN76°Eである。ピット径は60~70cmで、検出面からの最大深は60cmである。ピット内から土師器が出土している。



SB-1

SB-2

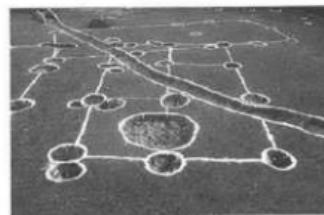
g-11区に検出した。2間×3間で棟方向はN80°Eである。ピット径は60~80cmで、検出面からの最大深は55cmである、ピット内から土師器・須恵器が出土している。特にNa 5のピットには根固めとして多量の須恵器が使用されており、また雁又形の鉄鏃1本が出土している。



SB-2

SB-3

h-11区に検出した。2間×3間の総柱建物で棟方向はN83°Eである。ピット径は50~60cmで、検出面からの最大深は55cmである。ピット内から土師器・須恵器が出土している。



SB-3

SB-5・6・7

i-10区に検出した。2間×3間でSB-7

のみ東側に庇を持つ。ピットの切り合ひ状況からSB-5⇒6⇒7の順に立て替えられたものと思われる。棟方向はN169°E～N176°である。ピット径50～60cm、検出面から最大深45cm、ピット内から土師器・須恵器が出土している。

SB-9

h-7区に検出した。2間×3間で北・西の2面に庇を持ち、棟方向はN85°Eである。ピット径は25～30cm、検出面からの最大深は30cmである。

SB-10

i-4区に検出した。1間×5間で棟方向はN90°Eである。ピット径は25～30cm、検出面からの最大深は20cmである。ピット内から土師器が出土している。

SC-1

c-10区に検出した。長径160cm、短径140cmの楕円形プランで、埋土はボラを含む黒褐色土の單一層である。土師器が出土し、炭化物が若干見られた。

SZ-1

f-9区に検出した。SC-3と切り合う。長軸170cm、短軸130cm、深さ150cmの不整長方形プランで、三隅に柱を立てたと思われるピットと壁の抉り込みが見られた。南側には床面から約50cmの高さに出入り口様の張出し部が見られる。埋土は下半部が擾乱土の一括埋め戻しで、遺物は見られなかった。時期・性格ともに不明である。



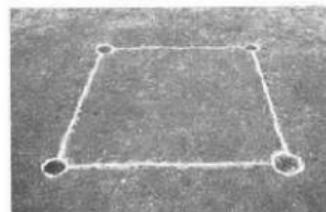
SB-5・6・7



SB-9



SB-10・11・12



SB-15

B地区

SA-1

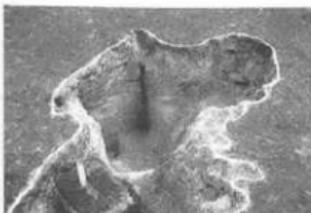
e-30区に検出した。長軸380cm、短軸350cmの隅丸方形プランで、検出面からの深さは約65cmである。南壁には床面から約35cmの高さにステップ状の掘り残しが見られた。約2m外側には最大幅60cm、最大深25cmの円形周溝を持つ。埋土はボラを含む黒褐色土の一括埋め戻しである。遺物には弥生後期の土器片、チャート製打製石器が見られたが、いずれも床面からかなり浮いた状態で出土しており、埋め戻しの際に流れ込んだものと思われる。

SA-2

e-29区に検出した。長軸340cm、短軸300cmの隅丸方形プランで、検出面からの深さは約75cmである。埋土は3層に分けられるが、基本的にはボラ土を含む黒褐色土の一括埋め戻しである。遺物には縄文後期の土器片、弥生後期の土器片が見られたが、いずれも床面からかなり浮いた状態で出土しており、埋め戻しの際に流れ込んだものと思われる。

SC-1

f-24区に検出した。長軸140cm、短軸90cmの不整楕円形プランで、検出面からの深さは約50cmである。埋土は、ボラを含む黒褐色土の一括埋め戻してある。完形の複合口縁壺（無文）が見られた。



SZ-1



SA-1



SA-2



SC-1



SC-2



SC-3

2. 遺 物

A地区では、約3000点の遺物が調査区の南東部及び北西部の二箇所に集中して見られた。調査区南東部は平安時代の掘立柱建物群の周囲であり、遺物も同時期の土師器・須恵器・布痕土器がその殆どを占める。土師器は、环・皿・碗などで内黒の土師器も多く見られた。掘立柱建物の柱穴内からの出土も見られ、その殆どが小さな破片での出土である。环や碗の底部外面や側面に漢字や記号の墨書きを持つものが8点確認された。須恵器は土師器とともに最も多く出土している。多くは内外両面に叩き痕を持つ壺・壺形であるが、高环・环・蓋・羽釜(?)等もわずかながら見られた。自然釉の付着する須恵器も多く見られた。布痕土器の多さも遺跡の性格を検討する上で重要な意味を持つ。越州窯系の青磁や蛇の目高台の白磁など輸入陶磁器も注目される。S B - 2 の柱穴からは雁又形の鉄鑓が出土している。約10cmと大型の鉄製釣針1点、土鍾25点も出土している。石製品には、二条の擦痕を持つ砥石や用途不明であるが加工痕を有する怪石が見られた。調査区北西部の遺物群は、弥生時代後期から古墳時代初頭にかけての土器群であったが、当該期の遺構は検出されなかった。



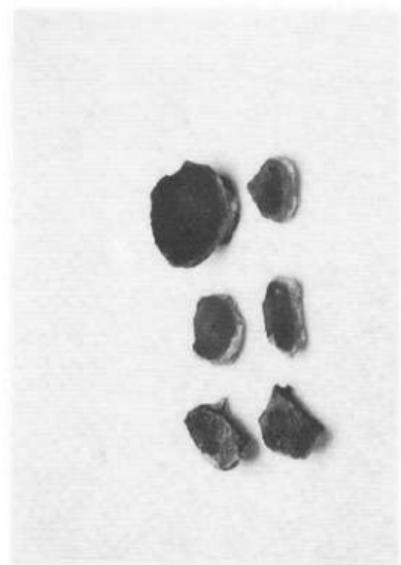
遺物出土状況



土鍾出土状態



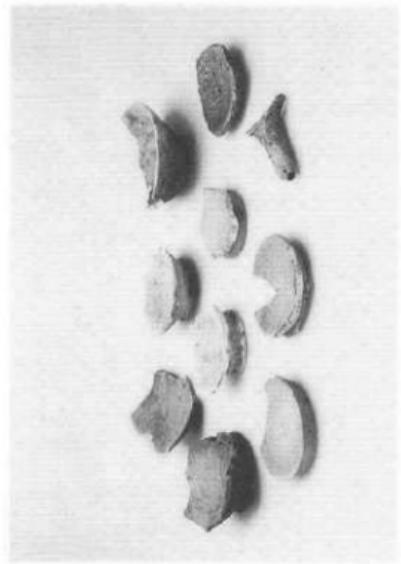
鉄製釣針出土状態



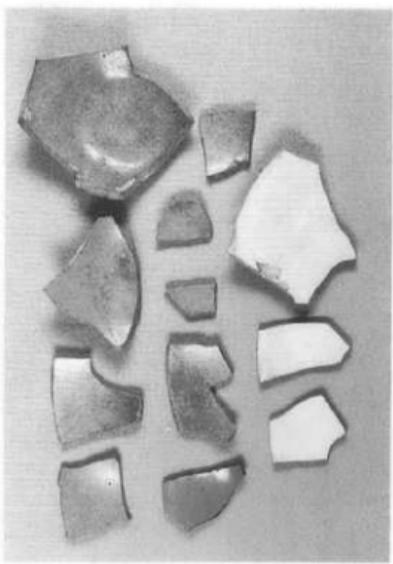
内黑土器



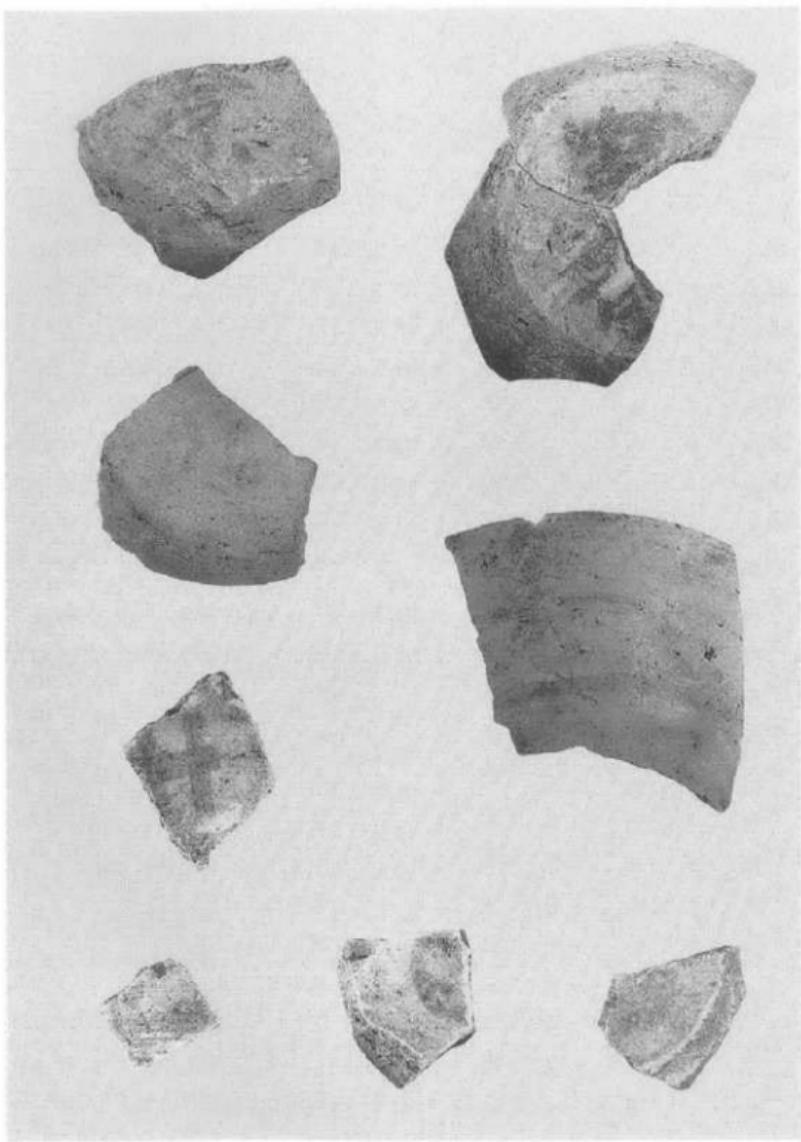
同 外面



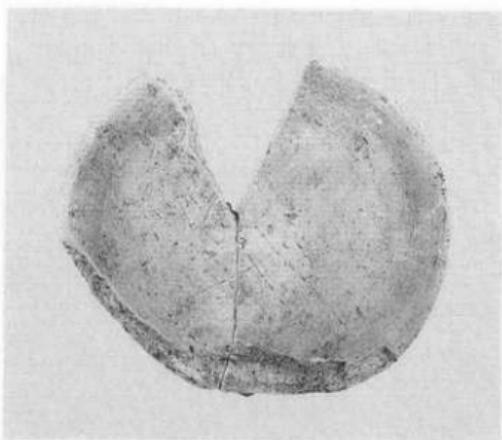
土器



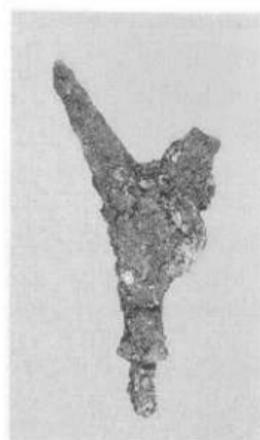
青磁・白磁



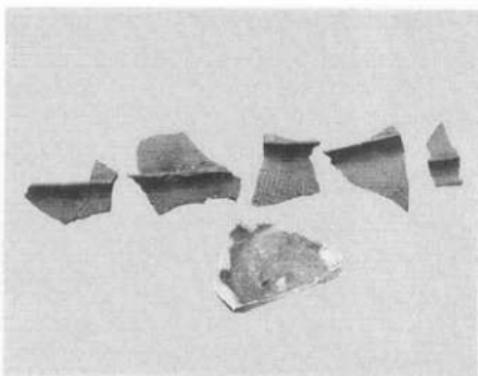
墨書土器



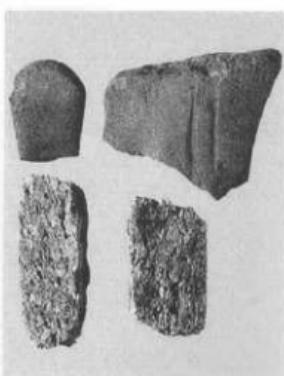
線刻土師器



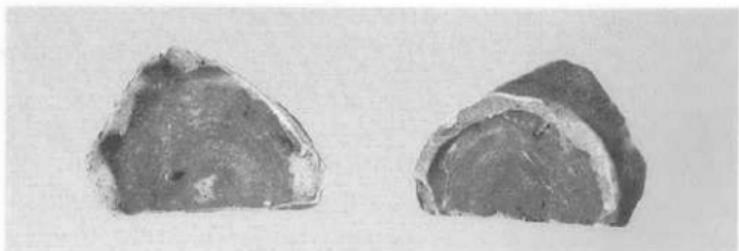
雁又形鐵鑛



須恵器（羽釜）・瓦質土器



砥石・輕石製石製品



瓦質土器

B地区では、約800点の遺物が調査区中央から西寄りの部分に集中して見られた。弥生中期から後期にかけての土器群が大部分を占め、中でもL字形・く字形の口縁部下に一条の刻目突帯を持つ壺形土器が多く見られ、丹塗の須久式壺なども出土している。厚手の器壁に指先でつまみ出した波状の突帯を4、5条有する粗製の壺形土器も見られた。少数ながら出土した縄文土器は、肥厚した口縁部に沈線と刺突文を有するものや、磨消縄文系のものなど後期の土器と思われる。また、石器には磨製石鎌や磨製石斧が見られ、未製品と思われる擦痕を持つ剥片等も出土している。



遺物出土状況



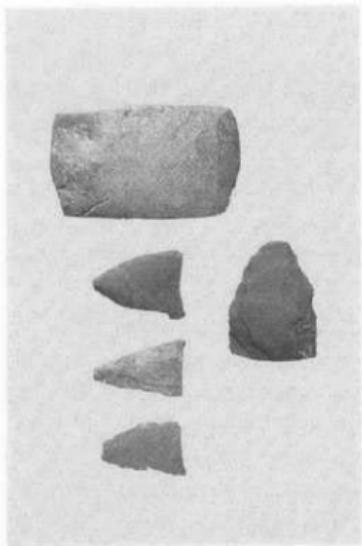
弥生土器出土状態



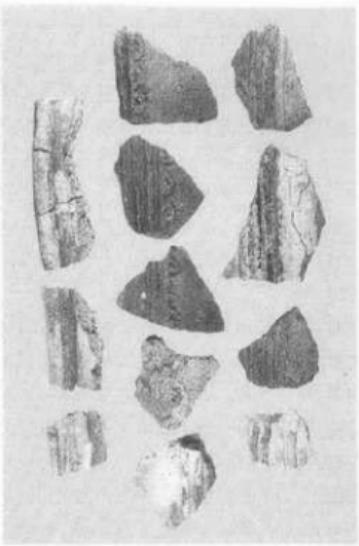
SC-1 出土壺



SC-4 出土土器



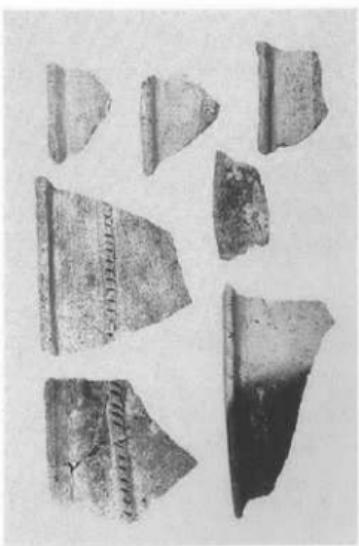
石鎌·石斧·剥片



砾石土器(2)



繩文土器



弦生土器(1)

IV 小 結

今回の調査により検出された遺構は、竪穴状遺構3基、掘立柱建物16棟、土杭16基、溝状遺構1条等である。出土遺物は、縄文後期から中世にいたるまで約4,000点にものぼる。これらの遺構・遺物はこの地域の歴史を振り返る上で大変重要な情報を無限に内包している。この大きな成果は、一部とはいえ消滅していった貴重な遺跡の代償である。今後整理を進め、より多くの情報を引き出し、報告して行くことが遺跡に立ち会った者の使命である。ここでは、本報告に向け今後検討すべき課題・問題点について若干の私見を交え述べてみたい。

A地区で検出された16棟の掘立柱建物は、大きく二つの時期に分けられる。SB-1～7は平安時代のもので、柱穴が大きく検出面から深さも40～60cmと比較的深い。柱根も明瞭に観察できる。これらに対しSB-8～16は、柱穴が30cm前後とやや小さめで検出面からの深さも10～30cmと前者に対して浅い。時期的にはやや下るものと思われ、中世のものと思われる。遺構分布については、平安時代の遺構は調査区南東部にかたまって検出され、さらに南側に拡がるものと思われる。SB-2・SB-3とSB-4が切り合っており、SB-5～7は建替えを示す検出状態であった。中世以降のものは、切り合いや同時存在を否定するような近接する状況での検出はみてない。遺構の時期幅については言うまでもなく出土遺物の詳細な検討が必要であるが、特に平安時代のものについては、大量の須恵器が大きな手掛かりとなろう。

遺物については、平安時代の遺構やその周辺に集中しており、中でも墨書き土器^①、雁又形の鉄鎌、越州窯系青磁^②、須恵器・布痕土器の大量出土などが注目される。当時文字文化を持ち、鉄製武器や輸入陶磁器、須恵器・布痕土器などを所有し得るのは、かなり限られた階層の人々であろうと思われる。官的機関との関連も考慮すべきであろう。なお今回の調査では、墨書き土器の出土に対し硯が見られなかった。須恵器片等の転用硯の有無についても今後検討が必要である。

B地区で検出された竪穴状遺構2基は、ともに方形プランで柱穴を持たない。埋土は一括の埋め戻しの可能性が高く、出土遺物も混入したものであり明確な時期を特定し難い。SA-1は方形の周溝を伴う。竪穴部はSA-2と規模・形態ともに明確な差異は認められず、両者の時期・性格については類例との比較検討を要する。周辺で検出された土杭の中には、その形態から墓壙と思われるものも含まれ、竪穴状遺構とともにさらに慎重な検討が必要である。

今後、検討を加え本報告に期したい。

註 (1) 墨書き土器については重永卓爾氏（都城文化財専門員）、永山修一氏（ラ・サール高等学校教諭）にご教示いただいた。

(2) 大橋康二氏（佐賀県立九州陶磁文化館）のご教示による。

(単位: cm)

上大五郎遺跡・掘立柱建物一覧表

遺構 番号	規模 (間)	方向	柱長	柱間	梁行	梁長	柱間	方位	床面積 (m ²)	柱穴			柱根径	時期	備考 (出土遺物等)
										柱數	Pit. 径	Pit. 深			
SB-1	2×3	東西	710	230	425	220	N76°E	30.7	10	60~70	45~60	20	平安	土師器	
SB-2	2×3	東西	683	230	428	213	N80°E	29.1	10	60~80	45~55	16	平安	土師器・須恵器・鐵器	
SB-3	2×3	東西	685	227	350	173	N83°E	24.2	12	50~60	30~55	15	平安	縦柱・土師器・須恵器・鐵器	根固鑿石
SB-4	2×4	南北	838	165~250	404	204	N153°E	35.2	12	40~50	15~35	16	平安		
SB-5	2×3?	南北	-	240	440	225	N169°E	-	10	50~60	35~40	25	平安	土師器	
SB-6	2×3	南北	630	215	475	235	N169°E	30.4	10	50~60	35~40	22	平安	土師器・根固鑿石	
SB-7	2×3	南北	640	217	375	190	N176°E	25.1	14	50~60	35~45	20	平安	一面庇・土師器・須恵器	根固鑿石・32.8m ²
SB-8	2×3	東西	640	213	385	195	N91°E	25.8	10	25~30	10~35	-	中世		
SB-9	2×3	東西	615	205	390	193	N85°E	23.9	17	25~30	15~30	-	中世	二面庇・33.0m ²	
SB-10	1×5	東西	1150	220	345	345	N90°E	40.3	12	25~30	10~20	-	中世	土師器	
SB-11	1×5	東西	1150	229	335	335	N94°E	39.2	12	25~35	15~25	-	中世		
SB-12	1×3	南北	580	195	360	360	N4°E	20.5	8	25~30	10~20	-	中世		
SB-13	2×4	東西	690	221	390	195	N84°E	34.8	12	25~30	15~30	-	中世		
SB-14	2×3	南北	600	200	425	210	N172°E	25.3	9	30~35	10~15	-	中世		
SB-15	1×1	東西	304	-	278	-	N64°E	8.4	4	30~35	10~15	-	?		
SB-16	1×1	東西	147	-	127	-	N72°E	1.9	4	25~30	25~35	-	?		

-は不明。桁行、梁行、Pit. 径、Pit. 深、柱根径は平均値。備考欄の面積は庇部を含む。

都城市文化財調査報告書第22集

丸谷地区遺跡群
上大五郎遺跡

平成5年3月

発行

都城市教育委員会

都城市姫城町6街区21号

印刷

有限会社 文昌堂